

## 文庫本に目を奪われる

朝比奈 恭

## Cinema

『PERFECT DAYS (パーフェクト デイズ)』  
(2023年、日本)

ヴァイム・ヴェンダース監督、役所広司主演の話題作『PERFECT DAYS』を観た。東京スカイツリーが見える場所にある古いアパートに一人で住み、朝早く起き、公園のトイレの清掃で生計を立てる男が主人公だ。この男を役所広司が演じ、カンヌ国際映画祭で主演男優賞を獲得している。

この男、黙々と徹底的に便器を磨く。お昼は、公園のベンチでサンドイッチを食べ、木漏れ日をフィルムカメラで撮影する。夕方は居酒屋で食事をし(甲本雅裕演じる大将がいい味!)、石川さゆりがママの-snackに時々、通う。どうやら互いに好意を寄せているようだ。浅川マキが日本語の歌詞をつけたアニマルズの「朝日のあたる家」を歌う石川さゆりが素晴らしい!

家に帰れば、文庫本を読む。棚には文庫本のほかに、カセットテープがぎっしり。判で押したようなシンプルな毎日である。

男の名前は平山。そう、小津安二郎監督の「東京物語」(1953年)と、遺作となった「秋刀魚の味」(1962年)で笠智衆が演じた役名である。ヴェンダース監督が小津監督を大変に尊敬しているのは有名だ。少しオーバーに表現すれば、「東京物語」も「秋刀魚の味」も特別な事件が起きるわけでもない日常を淡々と描きながら、映画の終わりには、変わらないと思えた日常に大きな変化が訪れる。

『PERFECT DAYS』もそんな作品だった。ある日、姪のニコ(中野有紗)が家出して転がり込んできてから、平山の日常が変わり始める。観客にも、謎だった平山の過去が次第に明らかになってくる。平山の妹ケイコ(麻生祐未)が、ニコを連れ戻しに高級外車に乗ってくる。兄妹の会話から、昔、平山は父親と(おそらく)生き方をめぐって大喧嘩して家を出たのさうとわかる。



## Book

『木』 幸田文著  
新潮文庫、539円(税込)

アメリカン・ニューシネマの一作「ファイブ・イーザー・ピース」(1970年、ボブ・ラフェルソン監督)を思い出した。高名な音楽家の家庭に生まれながら、ドロップアウトした若者をジャック・ニコルソンが演じていた。しがらみのない生活を求める点では、平山と共通するが、ニコルソンの自堕落さに比べ、平山の生活ぶりはシンプルで清潔。育ちの良さも感じられる。

平山が住む古い建物と、ピカピカの高級外車の対比が鮮烈だ。ガラケー、カセット、文庫本…平山のなかでは時間が止まっているようだったが、また、新しい時を刻み始める。平山が避けてきたしがらみを少しずつ受け入れていく、と解釈すべきか。コロナ禍で生まれた社会、人々の分断が修復されていく姿や希望を平山に重ねたのか。解釈は多様だろう。

そういう物語とはまた違ったところで興味を引かれた点が多々あった。まずは、オシャレな公共トイレの数々である。著名なクリエイターが公共トイレのデザインを担当する、東京都渋谷区と日本財団の共同プロジェクト「THE TOKYO TOILET」のトイレだ。なかでもアツと驚いたのは、建築

界のノーベル賞と言われるプリツカー賞受賞者、坂茂氏の「ザ トウメイ トウキョウ トイレット」。外壁は透明だが、鍵をかけるとパッと不透明になる、手品みたいなトイレだ。

小さな文庫本にも目を奪われた。映画のなかで、ノーベル文学賞を受賞したウィリアム・フォークナーの「野生の棕櫚」、イヤミスの女王ことパトリシア・ハイスミスの短編集「11の物語」、幸田文のエッセイ集『木』などが出てくる。古書店で『木』を買おうとすると、犬山イヌコ演じる店主が「同じ日本語なのにどうしてこう違うんだらうね」みたいなことを言う。

幸田文は、幸田露伴の娘であり、その随筆に定評があることは知っていたが、読んだことはなかった。この映画に刺激を受けて『木』を読んだら、古書店主の言う通りだった。

文の「草木好き」は、小説家の父露伴がそう仕向けてくれたからだに記す。こんなエピソードがある。露伴が文へガマ口を渡して、縁日の市でお前の娘の好む木でも花でも買ってやれ、と言う。幼い子が選んだのは高級品の藤の鉢植え。しかし文はかわりに小さい山椒の木を買った。その報告を聞いた露伴は怒る。「多少値の張る買い物であったにせよ、その藤を子の心の養いにしてやろうと、なぜ思わないのか、その藤をきっかけに、どの花をもいとおしむことを教えてやれば、それはこの子一生の心のうるおい、女一代の目の楽しみにもなるう…」露伴の言葉も見事なら、それを思い出しての文の語り口も見事である。

露伴は、樹木への関心が広がっていけば、それは「財産をもったも同じこと。これ以上の価値はない」とも言う。『PERFECT DAYS』の平山は、昼食を食べるなじみの場所で、大きな木の根元にある小さな芽を見つけ、大切に家に持って帰り、育てる。木が平山の財産なのだろう。文庫本の『木』のカバー絵は、木々の葉が生む木漏れ日。映画と本がマッチしてぜいたくな余韻に浸ることができた。